

といふことである。

しかし、常没の群生の上に易行道が果
遂せられ、以て「信心清淨」の了解が獲
得せられることは、まさに至難の事柄で
なければならぬ。夫故に、佛道を求め
ることは「三千大千世界を擧ぐるよりも
重く、」そのためには「身命を惜まず晝夜
精進して頭燃を救ふが如くす」る諸の難
行が要請せられるのであつた。夫故に、
難行・易行とは決して異なる二道として
理解さるべきものではない。言ひ換へれ
ば不退轉地に至る過程が難行であり、不
退轉地に入れば、難行はそのまま易行へ
と轉ずるのであつた。智度論七十七卷に
未_レ得_二無生忍法_一、用_レ力甚易、譬如_二陸
行_一、得_二無生法忍_一、用_レ力甚易、譬如_二陸
乘船_一、是故無生法忍、諸菩薩所_レ貴。
(大正二五、六〇二、a)

と述べ、また世親の釋軌論 (Vyākhyā-
yukti) に「これは汝を利益 (hita) する
が故に、またこれは安樂 (sukha) にす
るが故に、……」といふ經の言葉を解釋
して、

利益するが故にとは諸の有學の者の
duḥkha pratipad (難行道) なり。安

樂にするが故にとは諸の無學の者の

sukha pratipad (易行道) なり。*

と述べてゐるのは、何れも同じ意趣を表
明するものであると理解せられる。智度
論と十住毘沙論とは易行道を以て初地不
退のものとし、世親の釋軌論はそれを無
學道の分位のものとするといふ修行階地
の與へ方の相違はあるが、難行道を以て
易行道への方階階梯とする意趣に於ては
何の相違もなく、それがインド大乘教家
に於ける難行易行に對する通念であつた
と理解せられるのである。

*この語は俱舍論二十五卷(冠導本、
十一左)所說の四通行の中に見られ、
翻譯名義集 1245—1248 には四道
(catvāraḥ pratipadī) として掲げ
られてゐる。

*北京版丹珠爾部經疏部第六十八函
六七b。

淨土論の課題

幡 谷 明

淨土論に菩薩の行道として明かされた
五念門は、轉依の行である前四門と、淨
土の行である後一門とに分けられる。即
ち前四門は、禮拜から讚嘆に、讚嘆から
作願に、作願から觀察にと漸次に成就せ
られることにより、善男子善女人が無住
處涅槃なる菩薩に轉依する、修道的展開
過程を示したものである。ここでは禮拜
・讚嘆の二門は作願・觀察二門の前段階
としての意味となり、作願・觀察二門に
示された止觀の變運行によつて、無分別
三昧が成就せられるのである。その點を
明確に表示したものが、佛莊嚴功德にお
いて述べられた不虛作住持功德成就であ
る。即ちそこでは、佛の本願力を觀じ阿
彌陀佛を見ることによつて、七地沈空の
難に墮せる未證淨心の菩薩も空過者の立
場を超越して、淨心及び上地の菩薩同様
に寂滅平等を證得するに至ることが示さ
れてゐる。茲に説かれる未證淨心の菩薩
とは、二地から七地に至る菩薩を言い、
それは善男子善女人のことを言うものと
見られる。それに對して、淨心及び上地
の菩薩とは、八地以上の菩薩を言い、それ
が廻向門に菩薩と説かれるものと考へら

れる。そのような轉換の契機をなす淨心の證得とは、無始時來の能所二執が破析せられて眞如法性の了承せられることを言い、空すらも實體的に執取する惡取見の空無せられたる態を言う。そこにおいては淨土も穢土と別離に實體的に存立するものではなく、煩惱の汚濁に覆障せられた世俗の上に開顯せられてゆくものとなるのである。そのような淨土の眞義が了解せられた態が、淨心すなわち信心の證得せられた態なのである。故に長行の冒頭において提起せられた、論の課題である起觀生信の問題は、この不虛作住持功德成就において答釋せられているのである。即ち世親においては、止觀雙運行を離れて信心證得は考えられなかつたのである。廻向門において示される善巧方便すなわち方便智業は、かくの如く信心を證得し柔軟心を成就して、無住處涅槃に趣入せる八地以上の菩薩にして可能であるから、それは淨土の行と言われる。

即ち善巧方便とは、前四門が勝義なるものに向つて趣入してゆく方向であるに對して、勝義から世俗への廻入の方向を示すものである。換言すれば、出世间無分

別智の後得清淨世間智への展開としての意味を荷うものである。そこに菩薩の心が般若心・方便心・無障心・勝真心と説かれる所以がある譯で、論は畢竟して無住處涅槃なる菩薩につき明かせるものである。

そのように善男子善女人が信心證得して菩薩に轉成することが、佛身顯現の成就すなわち三種莊嚴功德の成就と即一的なのである。その即一性を示すものが、願心莊嚴の語であり、有情成熟と言ひ國土清淨と言ふも、凡べては眞如法性の世間的實用に他ならぬから、入一法句と示されるのである。

佛教の業論より見たる親鸞聖人の宿業觀

舟橋 一哉

我々がこの世において受ける苦樂の境遇と、この世において各々が造り出して行く業と、この二つについて考へて見ると、前者は受動的に受けとつて行くものであるのに對して、後者は能動的に創造

して行くものである。このことは、苦・樂といふものが佛教では一般に受の心所(領納の義)として考へられてゐるのに對して、「業(カルマ)」には「創造する」の意味があることによつても、容易に想像できる。ところで、この二つを佛教その他ではどのやうに考へてゐたか。

一、宿作因外道の説。苦・樂の境遇は、すべて宿世において造つたところの業によつて決定せられてゐて、我々の自由意志のはたらく餘地は全くないと考へ、従つて、人間がその理想實現のために精進努力することを、有意義なるものとして認めることをしなかつた。その點においては、我々の業はすべて無意義である、と考へてゐた。

二、阿含經に顯はれてゐる原始佛教の説。苦・樂そのものに對して鋭い觀察の眼を向け、結局、苦・樂は心の影のやうなものであることを説いて、苦・樂の無自性なることを教へた。我々の業は人間の理想實現のためには有意義なるものである、と見てゐたことは勿論である。

三、部派佛教の中の有部の説。我々がこの世において受ける苦・樂の境遇は、